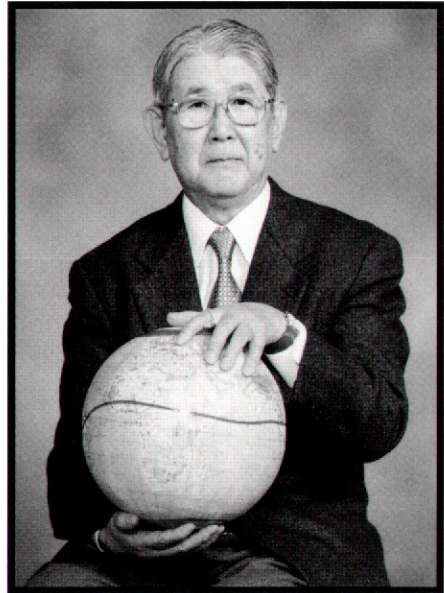


地球電磁気学の福島 直博士を追悼する

海野和三郎

天文と地球物理とは多分田中館愛橘、木村 栄先生あるいはそれ以前から近い関係にあったが、中でも地球電磁気学との関係は一段と深いものがあった。萩原雄祐先生が電離層研究連絡委員会長をしていたこともあって、戦時中も天文の畑中武夫先生と地球物理の永田 武先生が世話役として活躍されていたことが記憶に残っている。畑中先生は日本の電波天文学の生みの親ともいえる人であるが、永田先生は岩石磁気の泰斗で、海底岩石磁気の縞模様が大規模移動の根拠となったが、その基礎を作った功績は大きい。地球電磁気学は地球物理の中では新しい分野で、永田先生が東北大から来て東大地球物理の四本柱の一つ（他は気象、地震・火山、海洋）となった。福島 直さんは、その最初の頃からの生え抜きの永田研究室の一番弟子（？）でした。直（通称チョコ）さんと私は同期で、物理の講義は、七年生高校から来た物理の子どもっぽい秀才に混じって、気のおけない仲間としてよく隣に席をとって聞いたものでした。学部を出、大学院を出、似たような経歴で、その後東大理学部の同僚として長い付き合いでしたが、学問の分化は進み同じ学会で顔を合せるようなことはあまりありませんでした。

ところが、最近になって、理学部名誉教授の会で、直さんから耳寄りな話を聞きました。それというのは、伊能忠敬が測地に用いた時の地磁気の極がどこにあったかを彼が近頃研究していると言うのです。日食時に磁極がどう動くかといった興味からやっているらしいのですが、伊能忠敬の地図の緯度経度が今の緯度経度とあまり変わらないのは説明を要することで、科学史的な興味もあることのようにです。一方、国立天文台の谷川清隆君の部屋では、名大退官後遊びに来ている河鱈公昭さんや相馬 充君などが、中国や日本の古い日月食の記録を天体



福島 直氏

力学的に再検討しており、これまで不正確とされていた日本書紀の記録が正しいことなどを見つけたことを聞いていたので、これは面白いと思って、直さんに君のその話を是非天文台で話してくれと頼みました。以下はその時の記録：

金曜ゼミ：2002年3月8日（金）

午後1：30より3：30

福島 直（東京大学名誉教授・地球電磁気学）

（1）伊能忠敬図と磁極

（2）日食時における地磁気のあるまい

場 所：南研究棟 339（セミナー）室

つい最近、河鱈さんが福島さんに連絡をとろうとして亡くなられたことを知った、と聞いてびっくりしました。今年の2月には斎藤国治先生を失ったばかりで、淋しくなりました。

親友福島 直さんのご冥福を祈ります。

（先事館先事研究所／東京自由大学）